召喚獣の異世界物語

黒太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
召喚獣の異世界物語

【Ｎコード】
Ｎ７９９２Ｘ

【作者名】
黒太

【あらすじ】
ごく平凡な少年が異世界に召喚された。それも、召喚獣として！？魔法が存在する地球によく似た異世界で召喚した少女と召喚された少年の物語が始まります。

召喚者と召喚獣のファーストコンタクト（前書き）

この物語はフィクションです。実在する地名、団体、人物とは一切関係ありません。

召喚者と召喚獣のファーストコンタクト

「と、いうことなんですっ！お願いしますっ！」
その少女は少年にペコリと頭を下げた。その顔は真剣そのものだった。少年は微笑むとその少女に言った。
「お断りします。」
「どっどうしてですか！？こんなにも真摯に必死に熱心にお願いしているのに！？」
少女は断られるとは夢にも思っていなかったようで、ものすごく慌てふためいている。
「ここは、『分かった。僕で良ければ力になるよ。』とか言う場面でしょう！？と言うか、言うことを聞いてもらえないと私の立場上とっても困るんですけど！？」
「ここで快くお願いを聞き入れるのはアニメ(空想上の人物)や小説の主人公だけだ！それに、お前が困ろうと僕には関係ない！」
少しひどいかもしれないが少年からすればその少女の『とんでもないお願い』を聞き入れる訳にもいかなかった。
「うぅ…確かに関係ないかもしれませんけど……何もそんな言い方しなくてもいいじゃないですかぁ……。」
さすがに言い方がきつすぎたのか、その少女はべそをかき始めた。もともと可愛らしい顔つきをしていたし、涙目のその子を普段の少年が見ていたら多少ドキリとしていたかもしれないが、この少年は困惑していて、それ以上に少女の『ある言葉』に頭にきてそれどころではなかった。
「それになんなんだよ……僕が……召喚獣って！！！」

召喚者と召喚獣のファーストコンタクト（後書き）

初めまして。黒太と言います。拙い文章ですが、生暖かい目で見守ってくださると嬉しいです。

１―１　我、汝との契約を望む者なり（前書き）

この物語はフィクションです。実在する地名、団体、人物とは一切関係ありません。

１－１　我、汝との契約を望む者なり

数十分前

学ランを着た黒髪少年、大空日々也は自宅のドアを開けて中に入った。

「ただいまー。」

日々也が家に帰った時のあいさつをすると、奥のリビングの方から声が聞こえてきた。

「あ、日々也お兄ちゃんおかえりー。」

リビングに入るとソファーの上で雑誌を読みながらゴロゴロしている肩まで伸ばした茶髪とパッチリ開いた目が特徴的な彼の妹、大空明日香がいた。

「コラ、明日香。行儀悪いぞ。」

「ソファーはくつろぐための物でしょー？」

「問題はスカートのまま寝っ転がって、足を組んでるところだ。」

明日香は「ハーイ」と言うとソファーに座り直した。もう１４歳になる彼女はいわゆるお年頃のはずなのに、そういうことに関して全く気にしていない様だった。

だが、

「なぁ、明日香。」

「何ー？おにいちゃん。」

それは兄である日々也も同じということではない。

「前々から思ってたんだが、お前まさか外でもそんなんじゃないだろうな？」

「さすがに家以外の所ではちゃんとしてるよー。」

「本当だろうな？正直、兄としては気が気じゃないんだが。」

「お兄ちゃんは心配しすぎだよー。そんなに過保護にしなくても大丈夫だよー。」

妹の語尾を延ばす独特な喋り方にだんだん不満げな色が混ざってきているのも気にせず、日々也は続ける。
「心配するのは当然だろ？お前は大切な妹なんだから。」
「そういう事ばっかり言ってるからシスコンだと思われるんだよー。」
「過保護と言われようがシスコンと思われようが関係ない。僕はお前を守っていくって父さんと母さんに約束したんだから。」
明日香は「むぅー」と唸ったがそれ以上は何も言わなかった。
「はぁ…分かったよー。以後、注意しますー。」
「うむ。分かればよろしい。」
日々也は明日香の頭をクシャクシャと撫でるとリビングを出て、二階へと続く階段を上りながら言った。
「それじゃあ、僕は着替えて来るから夕ご飯の準備頼んだよ。」
「ハーイ。着替え終わったら手伝ってねー。」
「りょーかい」と言うと日々也は自室へと入り学生鞄を机の上に置くと、ふと窓の外を見た。太陽は沈みかけており、空はほんのりと赤く染まっていた。そんな物悲しい空を見ていると、ポツリと言葉が漏れた。
「父さんと母さんが死んでからもう5年……か」
二人の両親は5年前事故で他界していた。まだ11歳と9歳だった二人の引き取り手は見つからず、ずっと兄妹二人で暮らしてきた。明日香が先程文句を言わなかったのも兄が両親のお墓の前でしていた約束と、5年間ずっと自分の面倒を見てきてくれたことを考えると何も言えなかったからだろう。
日々也は妹にそんな風に気を遣わせてしまった事に情けなさを感じていた。
「っと、イカンイカン。ちょっとブルーになってたな。さっさと着替えて明日香の手伝いに行かないと。」
日々也が私服を取り出そうとタンスの取っ手に手を掛けた時
。

『…れ……の……を…む…なり……。』
「ん？」
声が聞こえた。
一瞬、空耳かと思ったが違う。確かにどこからともなく声が聞こえた。その声は最初は聞き取りづらかったが、徐々にクリアになっていく。
『えー、コホン。我、汝との契約を望む者なり。我が呼びかけに答えよ。』
（…えーっと、なんだこの状況は？）
明らかに妹の声ではないし、外から誰かが声をかけているという訳でもない。まるで、部屋のどこかから響いてくる様な感じだ。
（あー、幻聴ってやつか。最近バイトが忙しかったしな。うん、そうだ。そうに違いない。）
日々也はそう結論付け、タンスから着替えを出したところで、また声が聞こえてきた。『あれー？おかしいですね？ちゃんと繋がってないのかな？すいませーん。聞こえてたら、お返事してもらえますかー？』
「……幻聴が聞こえなくなるいい方法って無いかな……。」
『あ、良かった！ちゃんと繋がってたんですね。失敗したのかと思って心配しましたよー。』
日々也がボソリと独り言を言うと、それを返事と勘違いしたのかさっきまでより若干嬉しそうな声が返ってきた。
（あー、これは本格的にマズイかなぁ。よし、今日はバイトも無いし早めに寝よう。）　そんなことを考えながら制服のボタンにてを掛けたところで　　。
『それじゃあ、ゲート繋ぎますねー。』
そう聞こえたかと思うと、日々也の足下に光り輝く幾何学模様が現れた。それはゲームなどに出てくる魔法陣の様に見える。
「なっ・・・！！」
その魔法陣がいっそう強く輝き出すと、日々也は疑問の言葉を口

にする暇もなく光に包まれていった。

1―2　リリア・ルーヴェル（前書き）

この物語はフィクションです。実在する地名、団体、人物とは一切関係ありません。

１―２　リリア・ルーヴェル

フワフワとした浮遊感以外何も感じなかった。まるで水の中にでもいる様な感覚で、上下の区別が全くつかない。いや、そもそも上下があるのかどうかも分からない。

日々也は静かに目を開けると周りを見た。辺りは薄暗く、ほとんど見えない。時折ぼんやりと光る模様の様な物が見える。

（どこだ……ここ……？いったい……何が……？）

自分がどうなったのか？そして、これからどうなるのか分からない事が不安を煽（あお）る。さらにどこかに流されて行くような感覚がそれに拍車をかけていた。

（まさか…このまま死ぬ……って事ないよな？っ待て待て！！そんな事になったら明日香はどうなる！？それだけはマジで勘弁だぞ！？）

こんな状況で妹の事を真っ先に考えるあたりが彼がシスコンと噂される由縁なのだが、日々也自身は全く気づいていなかったりする。

そんな事を考えているうちに徐々に辺りが明るくなってきている事に気づいた。

（明かり……！出口か！？）

先程までの薄暗い空間とは打って変わって、まるで洞窟の出口の様な明るい光が見えてきた。そして、周りが完全に光に包まれたかと思うと、ずっと感じていた浮遊感が突然無くなり、代わりに生まれた時からずっと慣れ親しんできた重力を感じた。

「っとと。」

今までずっと浮遊感を感じていたせいか突然の重力に多少戸惑ったが、さっきまでの訳の分からない状況とは違い重力があると言う事実に安堵する。だが、視界はまだ白く、見回してみると煙の様な物がもうもうと立ちこめていた。その煙は自分の周りだけは晴れていて、半径５０？くらいの距離があった。日々也がふと、自分が腰

を下ろしている所を見ると木の床（らしき物）に先程自分の部屋に浮かび上がった魔法陣と同じ物がチョークか何かで描かれていた。
「何なんだ？これ……？」
そう呟いた時、煙の向こうから声が聞こえてきた。
「ケホッケホケホッ。うぅ……どうして召喚した時ってこんなに煙が出るんでしょうか……？ケホッ。」
どこかで、と言うかさっき聞いた声だった。
「この声……さっきの幻聴……？」
いや、もはや幻聴などとは思っていなかった。煙で見えないがすぐそこに誰かがいる。そしてその誰かは今自分がここにいる事と無関係ではないだろう。そう結論づけると、日々也は煙をかき分けて声のする方へと這っていった。すると、すぐにその声の主らしき人影を見つけることができた。
「ケホッ。あのー、ちゃんと召喚できてますかー？あのー……。」
「おい。」
「うひゃぁぁあああ！！」
いきなり耳元で声をかけられて驚いたのか、その人影は床に尻もちをついてしまった。徐々に煙が晴れ、その姿がはっきりと見えてくる。
「いたたた……。」
床にしゃがみ込んで腰をさすっているのは女の子だった。年齢は日々也よりも1、2歳下に見える。オレンジ色に見えるほど明るいサラサラとした茶髪を肩よりも少し長く伸ばし、白いシャツと赤いスカート、その上に薄い茶色のフード付きのローブを着ている。目はくりくりとして綺麗な琥珀色をしていて、ローブの袖からちょこんと出た手には杖が握られている。
「うぅ……いきなり声かけないでくださいよぅ。びっくりしたじゃないですか……。」
「知るかそんな事。」
日々也はふんっと鼻を鳴らした。少女を助け起こす気は無い様だ。

その少女は立ち上がると服をパンパンと払ってから日々也の顔をのぞき込んだ。
「えっと、あなたが私の召喚に応じてくれたんですか？」
「はぁ？」
突然の意味不明な質問に思わず素っ頓狂（すっとんきょう）な声を上げてしまう。
「あ、お名前は何て言うんですか？」
「え？あ…日々也……。大空日々也……だけど。」
日々也の少しギスギスした感じにも気づかず話し続ける辺り、この女の子はかなり天然なようだ。そのせいでペースを乱され、少女の質問に戸惑いながらもついつい答えてしまう。
「オオゾラ……ヒビヤさん……ですか？変わったお名前ですね。ああ、そうそう。私も自己紹介しないと、ですね。」
その少女はニッコリ笑うと自分の名を告げた。
「私はリリア。リリア・ルーヴェルです。よろしくお願いしますね。」

1―3　帰れない召喚獣（前書き）

この物語はフィクションです。実在する地名、団体、人物とは一切関係ありません。

1―3　帰れない召喚獣

「それじゃあ自己紹介も済んだことですし、さっそく契約しましょう。」

リリアと名乗った少女はそう言うと、持っていた杖を軽く振った。すると何もない所から突然一枚の紙が出てきた。

「えーと、ではまず……。」

「ちょっと待て。」

「はい？何ですか？」

リリアは持っていた紙から目を離すと、日々也に向き直った。

「これ、どういう状況だ？」

「？どういうことですか？」

何を言っているのか分からないといった様に小首を傾げながらリリアは訊ねた。だが、自分でも何が起こっているのかよく分かっていないのに一体何を聞けば知りたい事を教えて貰えるのか分からない。そこで日々也は少しずつ疑問を解消することにした。

「えっと……まず、ここはどこだ？」

「ここはハクミライト魔法学園の女子寮の私の部屋ですよ。」

「は？」

質問に答えてもらったはずなのに、日々也は余計訳が分からなくなった。聞いた事もない学校の名前を聞かされたのだから無理もない。しかも、魔法学園などと日常生活ではまず聞かないような単語が混ざっていた。冗談でも言われたのかと思ったが、そんな様子は無い。頭を抱えて唸っている日々也を不思議そうにリリアは見ていたが、暫くすると日々也に声をかけた。

「えーっと、そろそろ契約に移ってもいいですか？」

「まっ、待った！どうして僕はここにいるんだ？」

「それは、私があなたを召喚したからですよ？」

リリアはさも当然そうに答えたが日々也の頭は余計こんがらがる

だけだった。
「それにしても、不思議な召喚獣さんですね。まず身の回りの状況を確認するなんて。モンスターさんは生まれつき召喚についての知識を持ってるって授業で習いましたけど、あなたは違うんですか？」
「なっ！？誰がモンスターだよ！どこからどう見ても人間だろ！」
「え？私の召喚魔法で出てきたんですからあなたはモンスターさんなんでしょう？」
「だから！人間だって言ってるだろ！って言うか、さっきから召喚だの契約だのって何なんだよ！？」
モンスター（怪物）扱いされ頭にきたのか、またイライラしだした日々也が語気を強くしだしたがリリアは相変わらずのほほんとしている。
「召喚は召喚ですよ？他の世界にいるモンスターさんをこっちの世界に呼ぶんですよ。契約って言うのは、召喚したモンスターさん、つまり召喚獣さんと召喚者がお互いの利害が一致するようにする決めごとのことです。」
「つまり、ここは異世界だって言いたいのか？」
「ヒビヤさんからすればそうなりますね。」
バカげている、と日々也は思った。異世界だの魔法だのがあるとは思えなかった。だが、リリアの言っていることが本当なら一応つじつまも合っている。
「それで、その契約の話なんですけどね。」
日々也からの質問が途絶えると、リリアはさっきからしようとしていた契約の話を持ち出してきた。
「実はもうすぐ召喚魔法の試験があってですね。」
「試験？」
「はい。私今まで召喚魔法が成功したことが一度もなくて、一体も契約済みの召喚獣さんがいないんですが、その試験で上手く魔法が使えないと再試を受けなきゃならないんです。だから再試を回避する為にも、ヒビヤさんには是非とも私の召喚獣になってもらいた

い。と、言うことなんですっ！お願いしますっ！」
リリアは日々也にペコリと頭を下げた。その顔は真剣そのものだった。日々也は微笑むとリリアに言った。
「お断りします。」

そして、現在に至る

「大体、動機が不純すぎるだろ！何だよ再試を回避したいって！たったそれだけの理由で召喚される相手の身にもなってみろ！」
「い、いえ！そりゃあ第一目的は再試の回避ですけど、契約して頂けるんでしたらこれから生活していく上でも色々とお世話になることは多々あると思いますよ？」
日々也に言われてリリアは慌てて弁解した。
「ハァ……。まぁ、いい。とにかく僕を元の世界に戻せ。」
「うぅ……やっぱり契約してくれないんですか？」
「当然だろ？戻らないと明日香…僕の妹が心配するし、僕には僕の生活がある。」
リリアはグシグシと涙を拭うと魔法陣を指さしながら言った。
「う～……分かりました。それじゃあ魔法陣の真ん中に立ってください。」
「ん～と、ここで良いのか？」
「はい。良いですよ。」
日々也が魔法陣の真ん中に立ったのを確認すると、リリアはコホンと咳払いをし、ワンドを両手で持つとその先端で魔法陣をコンコンと叩くと言った。
「契約中止。我、この者が元の世界に帰することを望む。」
「……。」
「……あれ？」
しばらく目を瞑ってジッとしていたリリアが首を傾げた。
「お、おい。どうしたんだよ？」

「え、え～と。ちょっと待ってください。」
そう言って何度かリリアはワンドで魔法陣を叩いてみたが何かが起こる様子は無い。
「魔法陣が反応しない……と言うか、魔法陣とヒビヤさんとのリンクが切れてる……。」
「え？あの、いまいち意味が分からないんだけど？」
日々也がそう言うと、リリアは顔を引きつらせながら言いづらそうに言った。
「え～っとですね、簡単に言うと……その……元の世界に戻せません。」
「なっ！何イイィィィィッ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7992x/

召喚獣の異世界物語

2011年11月20日16時23分発行